

## 第42回（令和3年度）北海道麦作共励会審査報告

第42回北海道麦作共励会の審査結果について、審査委員を代表して報告申し上げます。

令和3年産の全道の麦類の作付面積は、12万6,100haで前年より3%増加し、収穫量は約71万1,600トンで前年より13%増加しました。

秋まき小麦の全道平均収量は、599kg/10aで、前年対比111%、平年対比では117%と大きく上回りました。品質では1等麦比率89.6%、品質ランク区分もAランクとなりました。

春まき小麦の全道平均収量は、356kg/10aで前年対比99%、平年対比では106%となりました。品質では、降雨の影響もなく1等麦比率は88.5%となりました。

秋まき小麦の収量が平年を上回った要因として、出穂以降、高温少雨で経過したものの、平年より日射量が多く登熟好適指数（登熟期間中の日射量÷最低気温（最低））が平年並み～やや高くなったこと、また、少雨条件でしたが登熟日数43日を確保できたことがあげられます。

春まき小麦は、6月中旬から成熟期まで高温少雨の影響を受け、道北部や道央の一部では平年よりやや低収となり、道東では、日照時間が平年より長く登熟条件が良好であったことから多収となりました。

次に麦作共励会の経過について申し上げます。8月5日に第1審査委員会をweb会議で開催し、8月17日付けで各関係機関・団体に後援依頼と参加推進を行いました。

共励会への出展は全体で4点となりました。秋まき小麦は3点で、その内訳は、個人の部秋まき小麦第2部（秋まき小麦20ha未満）で2点。集団の部秋まき小麦で1点でした。春まき小麦は個人の部で1点の出展でした。

11月8日に第2回審査委員会を開催し、推薦調書を基に審査を行いました。部門毎の賞を選考し、11月26日までに現地調査を行い正式に各賞を決定しました。以下、最優秀賞者、特別優秀賞者の麦づくりの概要について紹介します。

### 【個人の部 秋まき小麦第2部 最優秀賞】

小清水町の和田哲也氏は、耕地面積38.5haで畑作専業経営を行っています。秋まき小麦、でん粉原料用ばれいしょ、てんさいを栽培しています。

令和3年産の小麦収量は969kg/10aで、地区平均の約1.4倍となっています。過去2年の平均も860kg/10aと安定した収量を確保しています。品質も全量1等Aランクと高水準を達成しています。

高位安定生産の要因として、適正輪作を維持するため、前作となる澁原ばれいしょをできるだけ速やかに掘り取り連作回避に努めています。

また、小麦収穫後に堆肥4t/10aを長期間継続して施用するとともに、後作緑肥（野生種えん麦）を作付けしています。

排水対策では、小麦収穫後には必ず心土破碎を実施するとともに、土壌分析結果に基づきpH矯正に努めています。

栽培では、は種精度の向上を図るとともに、緩効性肥料の活用した肥培管理が行われています。また、自動操舵技術を導入し、耕起作業やは種作業の省力化を図り、耕作面積がしても適期作業が実施できる体制が組まれています。

### 【個人の部 秋まき小麦第2部 特別優秀賞】

倶知安町の足立浩一氏は、経営面積約35haで秋まき小麦、ばれいしょ、てんさい、小豆、大豆、休閒緑肥を作付けする畑作経営を営んでいます。

令和3年産の麦収量は647kg/10aで、地区平均の1.4倍で、過去2年の平均でも676kg/10aとなっており、高い収量を確保しています。等級は、全量1等Aランクと高品質小麦を生産しています。

安定生産を達成している要因として、秋まき小麦と豆類が6年に1度の作付けとなるよう毎年

2 ha程度の休閒緑肥（エン麦野生種）を栽培し、土壤病害等のまん延防止に努めていることです。また、定期的に土壤診断を実施し、分析結果を参考に施肥を行っています。

土作りとして、堆肥はてんさいの作付け前年に2t/10aを施用し、麦稈はすべてほ場に還元しています。

多雪地帯であることから、早い時期から融雪促進を行い、雪腐病等の被害の軽減に努めています。また、施肥管理では、小麦の生育を観察しながら、各生育ステージに応じた追肥が行われています。

#### 【個人の部 春まき小麦 最優秀賞】

真狩村の向井翔一氏は、経営面積約39haで麦類（秋まき、春まき）、ばれいしょ、てんさい、野菜類（だいこん、にんじん等）の畑作・野菜の複合経営を営んでいます。

令和3年産の小麦収量は428kg/10aで、地区平均の約1.6倍と高水準となっています。また、過去2カ年の平均も356kg/10aと地区平均を上回っています。品質で、1～2等麦比率は95%でAランクを達成しています。

安定生産の要因として、多品目栽培であることを活かし4～6年の輪作が行われています。また、排水対策では、心土破碎の委託施工を毎年15ha程度実施するとともに、春先の土壤物理性の向上のため、耕作面積の約半分では秋にプラウ施工しています。

融雪促進では、積雪状況を確認しながら適期に融雪剤（土）を散布しています。

また、土作りでは、定期的に土壤診断を行い、分析結果に基づくpH改善や施肥を進めるとともに、麦稈のほ場還元と堆肥や豚ふんの計画的に施用されています。